

学習会開催結果【第1回】

日時：平成30年10月22日（月）午後6時30分～午後8時

会場：北区役所 大会議室

出席者：委員24名 区職員25名 合計49名

内容：○ 講演

テーマ：私たちの暮らしとまちづくり～人に優しいまちをめざして～

講師：大谷大学社会学部長 志藤 修史 教授

○ グループディスカッション

テーマ：①人に優しいまちとはどんなまち？

②人に優しいまち—そうなるために必要な条件、必要なことは？

【講演（要約）】

◆ 日常生活の中で大切にしていることから、地域での暮らしを考える

生活の中で大切に考えている事として多かった意見

- ① 生活の基盤となるお金やライフライン ② 保育，介護，役所が受け持つ「制度や施策」
③ 地域の交流や挨拶，集まる場，友人など

◆ 「交流と健康」の関係

「体の健康」…相談できる人がいる場合，身体的症状（疲れなど）が軽い。

「心の健康」…相談できる人がいない場合，精神的症状（不安，イライラなど）が多い。

⇒ 「まちづくり」は住んでいる人の健康のためになるとも言えるのでは。

◆ いざというときに頼りにしているのは？（南丹市美山町の調査）

「同居していない子ども」の次に「近所の人」

しかし，訪問頻度は，「近所の人」が「毎日」と圧倒的に多い。

⇒ 近所の力は大きい。

◆ まちづくりは、「ぬか漬け談義」（1日1回の手間，それぞれの味がある）

学区やNPO等の活動などには，それぞれの良さがある。互いに交流することが大切ではないか。

⇒自分自身の気持ちや生活にゆとりがないと，人には優しくできないもの。身近なところで挨拶と交流ができる仕組みがあれば。

【参加者の主な意見：人に優しいまちとはどんなまち??？】

- ・ 人に優しいまちとは「おおらかで，多様性を受け入れられるようなまち」。人に優しいまちであれば，表にでてくる現象としてお節介や挨拶があるはず。
- ・ 職場，近所などでは，遠慮や不安があり，あまり挨拶ができていない状況がある。各委員が周囲や子どもたちに挨拶をする姿を見せていけば，自然と広がっていくのではないかな。
- ・ まちづくり会議委員としては，人に優しいまちの環境づくりに取り組み，一住人としては，積極的にいろいろな方に挨拶していきたい。

学習会開催結果【第2回】

日時：平成30年11月26日（月）午後6時30分～午後8時

会場：北区役所 大会議室

出席者：委員20名 区職員25名 合計45名

内容：○ 講演

テーマ：災害に強いまちづくり～共助と自助のソフトパワーと要配慮者の避難支援～

講師：佛教大学保健医療技術学部教授 松岡 千代 教授

○ グループディスカッション

テーマ：①北区の防災マップで自分の居住地の危険場所を知ろう

②地域でのつながりの大切さや要配慮者について考えよう

【講演（要約）】

◆ 近年の災害対策の考え方

お互いに助け合う「共助」に加えて、自らが災害の備えをする「自助」も必要。

ハード面ではなくソフト面での対応が地域に求められている。

◆ 災害時に助けが必要な人

- ・「要配慮者」（高齢者、障がい者、乳幼児等、迅速・的確な行動が取りにくく被害を受けやすい方）
- ・「避難行動要支援者」（避難が必要な際に、助けが必要な方）

⇒地域力を高めないと、いざというときに助け合えない。**普段から、地域での繋がりの中で把握することが大切。**

◆ 避難支援のしくみ

個人情報への壁があり、要配慮者マップの作成が困難となっている。顔の見える関係づくり、要配慮者の防災訓練への参加など、地域のつながりをいかに作っていくかが大切。

⇒地域を縦割りではなく横につなげていく必要がある。防災訓練を中学校区単位もしくは隣の学区と一緒にするなど、少し広い視点で考えることができれば。

【参加者の主な意見：災害に強いまちづくりのために、取り組めそうなことは???】

- ・ 支援する側の民生児童委員らも高齢化している。大学と連携し、学生の力も借りたい。
- ・ 「情報待ち」の人もおられるので、地域で自助精神を促していきたい。
- ・ 実際に、誰が助けに行くかという点について、身内が遠方に住まれているため、町内会でフォローする必要があると考えているが、その考えをしっかりと地域内で浸透させる必要がある。
- ・ 社会福祉協議会を中心に“ほっとかへんで運動”を7年ほど前から実施している。要配慮者を把握し、町内会や組でフォローする取組である。まずは、パンフレットを作成し、全世帯へ配布。その後、民生委員、老人福祉員が家を訪ね、名簿への登録を促す。登録の際には、個人情報を開示することの了解を得ているため、登録された情報を、町内会長を含め、各種団体に共有している。

学習会開催結果【第3回】

日 時：平成30年12月20日（木）午後6時30分～午後8時

会 場：北区役所 大会議室

出席者：委員15名 区職員24名 合計39名

内 容：○ 講演

テーマ：家族とは何か～「家族」から（地域）社会を考える

講 師：京都産業大学現代社会学部長 藤野 敦子 教授

○ グループディスカッション

テーマ：世帯の多様化，個人化，グローバル化の中で，自治会（町内会）がうまく機能し，
発展していくためには？

【講演（要約）】

◆ 「家族」の多様化・個人化

家族：主観的なもの，時代，文化によって変化（従前：婚姻・血縁を中心とした小集団，核家族）

性別：N個（従前：男女の2つ），ペットも家族

⇒多様な家族イメージを排除するのではなく，どう包摂していくのが課題

◆ 「家族」と社会

歴史人口学者エマニュエル・トッドの言葉「その国の典型的な家族形態を見れば社会問題がわかる」

内婚：文化的結合，集団内の結束を高める／偏見・差別・排他性と結びつきやすい（日本）

外婚：自分達の手手段維持の目的／他集団の協力を得たい，征服したい

◆ 「直系家族」の思想的枠組み

- ・ 家の形成，結婚に対するハードルが高い。若者にとって結婚に対する社会的プレッシャーが高い。

⇒若者の未婚化

- ・ 長男が継承していくので，親と成人した子の同居に違和感なし

⇒独立・自立意識が低い

- ・ 親が教育熱心（家の者が子の養育・教育に責任を持つ）

⇒育児の社会化が進まず，保育所等の施設整備が進まないため，女性の就労による出生率低下

- ・ 日本には，直系家族の思想的枠組み（制度）が残っている

⇒多様な人とつながる価値観，思考の枠組みを持てるようになれば，少子化問題も解決し，人権を尊重する社会へ転換され，地域社会が豊かになっていくのではないか。

【参加者の主な意見：多様化する社会の中で，自治会（町内会）が発展していくには？？？】

- ・ 市外からの転入者，町内会に入りたくない人など，すでに地域は多様化しており，多様性を受け入れている。これまで同様，町内会に入れと上から押しつけるのではなく，「ふんわり」「ゆるく」「じわじわ」と入りやすい雰囲気を作っていく必要がある。
- ・ 男女関係を主軸として，そこに子どもがいるのが「家族」だという意見が主流であった。ゲイやレズビアンのカップルとは，家族や幸せの考え方が異なっていると感じた。
- ・ 「高齢化・少子化による担い手不足」について，町内会役員は圧倒的に女性が多いので，仕事で忙しい若手男性をいかに一本釣りして巻き込むかが大切。

学習会開催結果【第4回】

日時：平成31年1月15日（火）午後6時30分～午後8時

会場：北区役所 大会議室

出席者：委員18名 区職員19名 合計37名

内容：○ 講演

テーマ：地図を使って北区のまちの歴史を知る，伝える

講師：立命館大学文学部 河角 直美 准教授

【講演（要約）】

◆ 地図・史料から見る北区の姿

- 江戸時代から明治・大正期までは，水田，畑地が広がり，市街地はほとんど見られない。
- 北部山間部では，杉の細円材，杉坂などの木材，薪，炭，松茸などを生産
- 市街地近郊の農村では，米作，菜種，柿，茄子，すぐき，牛蒡^{ごぼう}，にらなどを生産
⇒市街地に供給，市内中心部の食を支える

（京都市の市町村合併 経過）

- 1931年（昭和6年） ^{おたぎぐん}愛宕郡上賀茂村，大宮村，鷹ヶ峰村が京都市に編入
- 1948年（昭和23年） ^{かどのぐん}葛野郡中川村，小野郷村が京都市に編入
- 1949年（昭和24年） ^{おたぎぐん}愛宕郡雲ヶ畑村が京都市に編入
- 1955年（昭和30年） 上京区から分区し，北区が誕生

◆ 市街地周辺の開発

- 明治期以降，急激な人口増に備え，市街地中心部や外周部の街路を拡築。
- 北区内では，大正期以降，西大路通，北大路通が整備されていく。
- 大正末期，新しく新設された街路に沿って土地区画整理事業が展開される。現在の西大路，北大路などのいわゆる外郭道路等に沿う形で，約425万坪におよぶ土地区画整理事業の区域が決定。

◆ 昭和10年当時の街路網

「土地区画整理事業の進展が見られるところ」（衣笠周辺等）

「まだ農村の佇まいが残るところ」（鷹ヶ峰周辺等）

「条里地割の名残が見られるところ」（上賀茂周辺等）

新しい町が出来つつある中，古い景観も残している北区の姿がある。

⇒農林業を生業としてきた頃から現在に至るまで，新しく転入して来られた方との関係性をうまく作りながら，街を形成してきた。